

井上靖

星と祭

星と祭

井上靖

新潮社版

星と祭

〈井上靖小説全集32〉



昭和50年4月20日発行

昭和53年4月30日3刷

定価 1200 円

© Yasushi Inoue, 1975,
Printed in Japan.

著者 井上靖

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一電

話・業務部(〇三)二六六一

五二一、編集部(〇三)二六

六一五四一郵便番号・一

六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えます。

目次

星と祭

五

桃李記

三五四

壺

三七二

道

三八三

二つの挿話

三九四

ダージリン

四〇一

自作解題

四二六

年譜

四三〇

装
画
加
山
又
造

井上靖小説全集

第32卷

星と祭

僧院

「この秋、エベレストの麓で満月を見たいと思っています。山に登る時間のやりくりはできませんし、まあ、その程度のことです。満足しようと思っています。いつかごいっしょに穂高で月を見たことがありますね」

四人の客の一人が言った。客はいずれも若いとは言えず、最年長者は四十歳には達している筈である。登山家としては一部には知られているが、一般的とは言えない。

もともとアマチュアあがりの登山家で、山が好きなのは人後に落ちないが、日本の登山界のどこかに籍をおくような柄ではない。しかし、四人のうちの二人は一応山歴と言えるようなものを持っている。四、五年前のことだが、ジュガール・ヒマールのマディア・ピーク（中央峯）という

のに最初の足跡を印している。

「エベレストの山麓で、どんなところかな」

主人の架山洪太郎は眼をちよつと光らせて訊いた。物事に関心を持った時の癖で、煙草を灰皿の中にしきりに押し潰している。

「タンポチエという集落で、僧院のあるところです。そこで十月四日の満月を見ようというわけです」

「なかなかよさそうだね」

「たいしたことはありません。ただそこで満月を見るだけのことですからね」

「穂高の月見よりいいだろう」

「そりゃあ、まあ、エベレストの麓で月を見るわけですから、多少は違った趣があるかも知れません。しかし、月は月です。同じまんまるいやつが出て来るだけのことです。たいしたことはありません」

「変な言い方をするんだね」

「でも、本当にそうなんです。帰って来てから話をしてあげます。月は明るいとは思いません。が、まあ、それだけのことです。しかし、僧院のある集落というのはいいでしょう」

「気を持たせるね。一体、どのくらいの日数が必要」

「何日も要りませんよ、僕たちが行くんですから。九月二

十九日の十三時三十分に羽田を発ちます。香港、バンコック経由で、その日の二十三時四十五分にニューデリーに着きます。ニューデリーに一泊してネパールのカトマンズにはいります。それから十月一日にルクラというところまで飛行機で飛び、二日にルクラからナムチェバザールまで、三日にナムチェバザールから目的地のタンポチエまで、いずれもキャラバンを組んで歩きます。その翌日が十月四日で満月です。それを見たら五日にそこを發ち、カトマンズには七日にはいります。折角行ったものですから、三日ほどカトマンズで昼寝し、おそくも十三、四日には東京に戻る事ができるでしょう」

「二週間だな」

「二週間ちょっとです」

「行ってみたいね」

「もしいらっしゃるなら、ルクラからナムチェバザールの間にキャンプ地を造ります。僕たちには一日行程ですが、あなたがいらっしゃるなら、そこに二日かけます」

客は言った。いずれにしても大分先の話である。いまはまだ五月にはいっただばかりである。

「一体、僧院のある村というのは、標高はどのくらいかね」

「カトマンズが上高地ぐらいで、千四、五百です。そうで

すね、ナムチェバザールが三千四百少しでしょうか。タンポチエ、ここが僧院のあるところですが、ここは三八六七メートルです」

「僧院で月見をするの？」

「そりゃ、無理でしょう。やはり、近くの民家にはいるか、テントをはるか」

「民家はあるんだね」

「僧院があるくらいですから、もちろん民家はあると思います」

「じゃ、僕でも行けるな」

「誰だって行けますよ。コースはエベレスト街道です。エベレストの東海道です。それに歩くと言っても、キャラバンを組んで行きます。シェルパ五、六人、ポーターも五、六人、もちろん驢馬も連れて行きます」

客は言った。

「行ってみたいね」

「あまり期待して戴くと困ります。いずれにしても、観月旅行なんですからね。宜しかったらごいっしょしますが、難しいんじゃないですか」

「そうでもない。行く気になれば行けないことはない」

架山は言った。実際に行く気になれば行けないことはなかった。しかし、いまは氣持が傾いていても、あとになっ

てその気持がどうなるか見当が付かなかった。客の方は客の方でまた架山のそういう気持の動き方を承知の上での応対であった。

「よし」

架山が言うと、

「よしというのはどういう意味ですか」

「考慮に値する問題だという意味だろうね」

「まだそんなところですか」

客は笑った。架山は親しい年下の登山家とのお喋りがけっこう楽しくなっていた。会社の仕事関係の訪問者と話していても、こういう楽しさはなかった。と言って、いっしょに長年山に登ったという間柄ではなかった。何年か前に大学の同級生で、やはり中級の会社の経営者になっている友人から、この登山家連中を紹介され、その時はなにがしかの金額をヒマラヤ遠征費用の寄付帳に書かされただけの話であったが、それ以来何となく親しくなってしまったのである。誘われて山というものにも初めて登った。山と言っても、穂高だけである。前穂、北穂といったところに二、三回ずつ登っている。

架山はこの連中のお蔭で、僅か三、四年の間のことではあるが、山というものに夢中になった時期を持った。しかし、そうした時期がすんで、この三、四年は山にご無沙汰

している。倦きたというわけではないが、会社の仕事も忙しくなり、年齢もそろそろ登山に向かなくなっている。考えただけで何となく億劫である。それが、エベレストで満月を見ると聞いた時、ふいに気持が動いたのである。

「僧院って、なんの僧院？」

主人は訊いた。僧院というものに多少気持がひっかかっている。日本流に言えば寺のある村で月を見るということになり何のへんてつもないが、エベレストの麓の僧院となると、妙にイメージの持つ色彩感覚が違ってくる。月は明るいだろうが、僧院の建物は暗い。その背景に白い雪の山が置かれている。

「ラマ教です。ラマ教の僧院」

客は答えた。

「なんだ、ラマ教か」

ふいに十字架のある尖塔が消え、僧服を纏った丈高い僧侶の姿が消えた。

「なんだとおっしゃるが、ああいうところのラマ教の建物はいいですよ。あなたがいらっしゃるとなると、ルクラからキャラバンを組んで出発して、二日目の宿泊地になりませんが、ナムチェバザールというところがあります。そこはチベットとの交易の根拠地として昔から知られています。そのくらいですから、あの辺一帯にはラマ教の寺院が多い

んです。大体、タンポチエというところは」

「そこで月を見るんだったね」

「そうです。問題の僧院のある部落です。紛れやすいですが、近くにパンポチエという部落もあります。そこにも僧院があり、そこは例の雪男の頭の皮が保存されてあること有名、——有名と言っているかどうか知りませんが、とにかく知られています」

「雪男の頭の皮か、変なものがあるんだね。そっちは要らんね、雪男の方は」

「これも、しかし、面白いです」

「面白いと言われても、どうもねえ、折角の僧院が台なしになる」

「ついでに話しただけのことです。いま言ったように、月見をするタンポチエ部落にあるわけじゃないんです。パンポチエの方」

「月はエベレストの上に出るの？」

「さあ、どのへんに出ますかね。周囲をぐるりと凄いのが囲んでいます。エベレスト、ローツェ、この二つは八千台、正確に言えばエベレストが八八四〇、ローツェが八五〇〇です。アマダブラムが六八〇〇、カンテガが同じく六八〇〇、タムセルクが六六〇〇ですか。とにかくそういう山々が囲んでいます。そこに月が出る」

「なるほど、ね」

こんどは少しイメージが変った。僧院の建物がひどく小さいものになり、そこで月を仰いでいる人間たちは点になった。

「無理にはお勧めしません。ご希望ならばごいっしょします。ヒマラヤ観月旅行というわけです」

「なるべく連れて行って貰いたい、今からでは予定が立たない」

「ネパールでの飛行機の子約だけの問題です。いらっしやるんでしたら、なるべく七月の中頃までに決めて下さい」

客は言った。

親しい登山家たちがヒマラヤ観月旅行の話を持ち込んで来てから、四、五日の間、架山はなんとなく楽しいものが行手に置かれてあるような気がした。まだそれを自分のものとするかしないか決まっていなかったが、自分がその気になれば確実に自分のものとするのできるものであった。

高山の月見は一回だけ経験があった。何年前か、山というものに熱をあげた時のことである。ヒマラヤの月見の話を持ち込んで来た同じ仲間に誘われて、穂高の湊沢で九月の満月の夜を過した。北穂、前穂、奥穂の穂高連峰が屏風

のように取り囲んでいる盆地のヒュッテで、八時過ぎまで月の出を待った。何となく戸外で観月の宴を張るようなつもりで出掛けて行つたのであるが、そんなわけにはいかなかった。ヒュッテを一步出ると凍りつくような夜風に震えあがつた。

八時四十分頃、屏風岩の肩から月が顔を出した。多少赤味を帯びた月で、それが静かにのぼって行くにつれて、前穂の山影が大きく、奥穂の大斜面に投げかけられて行つた。一本一草^{こいも}尽く白い月光に照し出されて行くといった下界で見る満月の夜とは大分趣を異にしていた。月も不機嫌であれば、夜の北アルプス連峰のたえずまいもまた不機嫌に見えた。

夜半にもう一度ヒュッテを出ると、こんどは奥穂と北穂の斜面が一面に雪でも置いたように月光で白々と見えていたが、前穂は依然として暗く押し黙っている。いかにも幾つかの山塊が身を寄せ合い、ある部分は月光のもとに白く輝き、ある部分は影になって、照したかったら勝手に照すのがやろう、俺たちの知ったことではないと、互いにむつつりと、息でもひそめているように見えた。いずれにしても昼間見る北アルプスの景観の大きさはなかった。月は相変らず赤味を帯びていて、上から不機嫌に幾つかの山塊を眺め渡している。光の照応というものはなく、月も、山も、

それぞれに気難しく、他を黙殺して孤独であつた。

その時、架山は月というものは一点の遮るものもない万頃^{ばんげん}一碧^{いつへき}の大海原とか大曠野^{たいくうや}で見えるものだと思つた。古来月の名所として知られているところは、例外なく平原を俯瞰^{ふくかん}できる丘陵か、あるいは視野を遮るもののない海岸であつた。架山は姨捨^{おやすて}の月も知っていたし、大洗の月も、銚子の月も、満洲の荒涼たる原野の月も知っていた。そのいずれにも、穂高で見た月の暗さはなかった。

エベレストの麓で月見をするという話を耳にした時、架山は穂高の月見のことを思い出し、規模は穂高の場合より大きいに違ひなかつたが、やはり満月の夜のエベレスト山麓は暗いだろうと思つた。

穂高の月が暗いように、エベレストの月も暗いに違ひなかつた。しかし、あとで考えてみて、その暗いエベレストの月に心を惹かれたのは、観月の場所であるタンポチエという集落に僧院があつたためであらうと思う。もし若い登山家の口から僧院という言葉が出なかつたとしたら、架山はエベレストの麓に於ける月見など、その場限りの話題として聞き流してしまつたのではないかと思う。わざわざキヤバンまで組んで、暗い月など仰ぎに行く気にはならない。

しかし、そこに僧院の建物を配してみると、エベレスト

の満月の夜は多少異つたものに見えた。僧院の建物からは燈火の灯がこぼれている。一つか二つの僅かな窓からこぼれている灯かも知れないし、幾棟もある建物の窓という窓からこぼれている灯であるかも知れない。その灯が螢の光のように冷たく小さいものであるか、あるいはまたクリスマス・ツリーの豆電燈のようにある華やかさを持ったものであるか、それは知らない。が、いずれにしてもその灯はそこに人間が生きていることを示している。しかも、僧院と言うからには、生きるということをし、少くとも世俗の人たちよりも真面目に考へている人々が住んでいると見ていいだろう。いかなる戒律を己れに課しているか知らないが、不自然であろうと、歪んでいようと、自分がよしとした生き方を選び、実行している人々が住んでいることだけは確かである。

そういう人間の集団を収めている建物を配すると、架山の眼には、もはやエベレストの月は単なる暗いものとしてだけは映らなかつた。周囲の山々は、その裾に人間の生活を置くことによって急に生き生きと息づき始めて来る。悠久な時間が流れ出す。月は孤独な、意地悪い監視者ではなくなり、いま確かにお前たちはここに生きている、その証人になってやろうとも言うように、真上から僧院の建物を照し始める。こうなるともう気難しく暗い月ではない。

戦時中のことであるが、架山は武昌で揚子江の流れを見たことがある。昼間見る黄濁した流れは、凡そ川と言えるようなものではなく、さながら暗鬱なエネルギーの移動そのものであった。夕暮時になると、どこからともなく女たちが岸に姿を現わした。襪を洗ったり、布をそいだりしている女たちを岸に配すると、揚子江の流れは全く別のものになった。その裾に小さい人間の生活を置いた悠久な何かであった。そして揚子江の流れと、女たちの心の触れ合いのようなものが、夕明りの中に漂い始める。

架山は、若い自分が揚子江の岸で感したものを、もし自分がその気になれば、ヒマラヤ観月旅行で再び自分のものにするのではないかと思つた。

架山はヒマラヤ観月旅行のことを、都心の大きなビルの六階で開かれた大学の同窓会の席で口に出した。

「この秋はエベレストの麓で満月を見ようかと思つてゐんだ」

すると、隣の席にいた人物は、

「大丈夫かい、心臓は。麓と言っても、エベレストとなれば相当な高さだろう。酸素欠乏でひっくり返りかねないよ」

身もふたもない言い方をした。

「君とは違う。俺の方は、まだ——」

架山が言いかけると、

「そう、僕は肥^ふっているし、君は瘦^うせている。瘦せていることで、君はまだまだ自分は大丈夫だと思^{おも}っているだろう。その自信というやつが甚^{はな}だ当^{あた}てにならない。多少贅^{ぜい}肉^{にく}がついているかどうかの違いではないか。まあ、無理をしないことだね」

「無理はしない。しかし、ちょっといい計画ではあるだろう」

「いい年齢^{とし}をして、変なことを考え出したもんだな。僕も学生の頃は、そんなことを考えたことがある。しかし、もう今は月見に金と時間をかける気はないね」

すると、左隣に席をとっているのが言った。

「まあ、やりたいことはやることさ。時間も残り少なくなっている。金もいくら費^つつても、知れたものだ。年齢をとると、ふいにロマンティックになることがあると言うが、こういうことなんだろうね。エベレストの麓で月見をするということは、そりゃ、贅^{ぜい}沢だよ。その贅^{ぜい}沢なことをしたくなるんだな。もう女もできない。仕事にも夢はない。子供も思うようには育たなかった」

「失礼なことを言うなよ」

「いや、君のことを言っているのではない。自分のことを

言っているんだ。——せめて、人のあまり見えない月でも見よう。こういうことになる」

こんどは向い側に坐っているのが、言葉をさし挟んで来た。

「月見とは古風なことを考えたものだね。大体、観月なんて言葉はなくなっているんじゃないか。月面に人間が降り立つ時代だからね。——そもそも月というものに特別な感懐^{かんわい}を覚えるのは東洋人だけではないのか。ヨーロッパ人は、月を見ても美しくも何とも感じないらしい。もし感じるとすれば性的なものと、俺の知っているヨーロッパ人は言った。月を見て性的昂奮^{きやうふん}を覚えるのも困りものだが、人生の無常を感じるのも、あまり感心したことではない。——しかし、ヒマラヤ観月か。悪くはないね」

架山は遠慮のない昔の友だちの話を聞いていて、それぞれになるほどと思^{おも}った。架山に健康上の注意をしたのは、同窓生の中では一番の成功者である。財界人として名がは出ているが、いろいろなところに引張り出されて、自分の時間というものは全く持っていない人物である。

——もう今は月見に金と時間をかける気はないね。と言ったが、気持があらうとなかろうと、時間的にそんな余裕はない人物である。エベレストから石油でも出ない限り、エベレストという山を地図の上で探すことはないだ

ろ。

人間、年齢をとると、女もできないし、仕事にも夢がなくなる。寿命も大部分費い果して先が見えて来る。こうなつた時、人間はロマンティックになる。贅沢なことをしたくなる。こう言つたのは大学の教師である。専攻は経済学。この人物によつて架山のヒマラヤ観月旅行は一つの性格を与えられたわけで、もはや何も夢がなくなった人間が最後に持つ夢であり、恋愛もできなくなった人間の最後の恋愛的行為であり、金の費いようもなくなった人間の最後の浪費であり、今や残り少なくなつてしまつた時間の最後の無駄費いというわけである。

そう言われれば、そうかも知れないと、架山は思う。若い登山家から異国の月見の話を持ち出された時、ふとそれに心を惹かれたのは、それがひどく贅沢なものとして感じられたからであらう。そしてそれが贅沢なものとして感じられたといふことの中にはいろいろなものはいっている。幾つかの要素に分析できるが、ひと口に言うと、老化現象といふことになりそうである。年齢的にある地点に達した男の最後の放蕩^{ほうとう}みたいなものである。

確かに悠久な時間の流れている大自然の一劃に、小さい人間の生きてゐる姿を嵌め込んで、さて、その上で月を觀賞するといふことは、ちよつと較べるものがないほど贅沢

なことである。芸術品を觀賞するのとはわけが違う。絵を美しいと見たり、彫刻を美しいと見たりするより、大分複雑になつて来る。自分を觀賞者の立場に置きながら、自分自身をもまた対象の一部として觀賞することになる。エベレストの僧院のある集落で月を見ることが、大自然の裾に生きている小さい人間の姿を、大自然と対比して觀賞するわけであるが、しかし、それを觀賞するためにはるばる出掛けて行く自分自身もまた、その小さい人間の生きている姿から例外ではないのである。月光に照し出されている僧院の中には自分もまた居るのである。

架山のヒマラヤ観月旅行が一座の話題に取り上げられて、いろいろなことが言われた時、架山はにやにやして遠慮のない連中の勝手な發言を聞いていたが、

「僕はエベレストの麓に月を見に行くが、君たちだって、僕の観月旅行に代るものを持たなければならぬだろう」

と言つた。俺のことを取り上げて肴^{さかな}にしているが、それならば一体、君たち自身はどうなんだと、多少意地の悪い問ひかけだつた。

「さあね」

一人はちよつと遠い眼をしたが、

「孫かな」

と言つて、笑つた。

「孫があるのか」

誰かが訊くと、

「一人ある」

「情ないことを言うなよ」

「情ないと思うが、まんざら冗談でもない。俺の孫娘は目下五歳で幼稚園に通っているが、何とかして娘夫婦の手から取り上げて、いっさい男などには見向きもしない美女に育てあげてみたいと思っている。ヨーロッパの美術館でよく高慢ちきで、鼻持ちならぬお姫さんの肖像画を見ることがあるだろう。イタリーのメディチ家の何代目かの総領娘だとか、ゴヤ描くスペインの王家のお姫さんだとか、美貌で、誇り高く、つんとしたやりきれないのがいるだろう。あんな風な美女にね」

「悪趣味だな。自分はさんざん勝手なことをしておいて、いよいよもう女から相手にされなくなったら、変な開き直り方をしちゃったもんだな。それでは、まるで、人生というもののへの復讐じゃないか」

「いや、違う。愛する孫娘を、汚れなく、ひときわ際立って美しく育てようということになると、さしずめこういうことになる。おそらく彼女は老いても、男に絶望することもないければ、子供に絶望することもないだろう。多少周囲から憎まれることはあるだろうが」

「いやな婆さんになるだろう」

「いやな婆さんになってもだ、まあ悲劇的女性になることだけはないだろう。これが、目下五歳の愛する孫娘に対する俺の愛情だね」

幾らか調子に乗って喋っている人物の顔を、架山は黙って眺めていた。そしてこの人物がいかなる人生を歩いて来たか、現在ある証券会社の重役に収まっているということ以外は、何も知らなかった。学生の頃はいつも隅の方で黙っているおとなしい青年だったが、それから今日までの架山の知らぬ歲月の中に、彼は彼なりのいろいろな経験を持っているのであろう。たといその場限りの冗談にしても、どこかに体験からだけしか得られないようなむきなものを感じられぬでもない。

「それにしても、孫娘を端倪すべからざる美女に育てあげるには、少し君の方の年齢が足りないだろう」

さつきから黙っている瘦せた人物が言うと、

「そうなんだ。いくら長生きしても、嫁にやったぐらいのところ、俺の方は終りになる」

証券会社の重役は笑った。いかにも楽しそうな明るい笑いだった。

「しかし、男などは見向きもしないと言え、女も、ある年齢に達すると、大体そうなるんじゃないか。男に仕事の

夢がなくなるように、女には男の夢がなくなる。子供の夢も、まあ、なくなる。多かれ少かれ、いかなる女もこういうところに立たざるを得ない。うちの内儀さんなどは、目下そういうところだ。本人はヒマラヤの月でも見たいかも知れないが、そういうわけにも行かないしね」

「そうだな、僕たちがヒマラヤの月を見に行ったり、孫娘にとんでもない夢を持ったりするように、女もまた何かを持たなければならんのだろうね」

架山は言ったが、あとは言葉を続けなかった。自分の言葉に対して一座が応じて来るのを待たないでも、架山は自分の答えを持っていた。しかし、それを発表しなかったのは、まあ黙っていた方が無難ではないかという気がしたからである。自分のヒマラヤ観月旅行に匹敵するものは、女の場合宝石ではないかと、架山は言いたかったのである。だが、相手によっては鼻持ちならぬ氣障きざうなものとして受取られかねなかった。

架山はある一人の女の言葉を思い出していた。あまり世間では評判のいい女ではない。身持ちの悪いという噂もあるし、金遣いも荒く、架山などはごめん蒙かぶりたい型の女性であるが、いつか耳にしたその女の宝石観くわんだけは、それを聞いた時から、妙に消えないで頭の中に居坐くわっている。

女も盛りをすぎて、男の言うことをあまり信用しなくな

り、子供への期待や夢にも限界があると知った時、もし金があれば、女は宝石に惹かれて行くのではないか。信心深い女は別にして、普通の女は改めて宝石というものを見直すようになる。日本には宝石にうつをぬかしたり、宝石漁りをするような金持はないが、屑ダイヤの一つぐらいは持てるなら持ちたくなる。たとい持てなくても、その魅力だけは判る。大体宝石というものはどこへでも持ち運びができる。自分からは逃げ出して行かない。小さくて、固くて、きらきら輝いている。正確に光を屈折させ、同じ正確さで女の心にある陶醉感で吸収して行く。それでいて、必要とあればいつでも金に替えることができる。男に期待して期待外れだったすべてのものを、宝石というものは具もえているということになる。

大体こういった話であった。ヒマラヤ観月旅行の方は浪費だが、宝石の方は取引である。片方には夢があるが、片方は醒めている。

ヒマラヤ観月の話があってから十日ほど経った頃のことである。架山は会社の社長室で、娘の光子からの電話を受取った。

「お父さんですか、わたし。——夕方お友だちとそちらに伺っていますか」